フークトーブ通信 73

本山白雲《ファン・ドールン像》―福島に遺るオランダ人の銅像

髙橋 翔（福島市）

本年は「夜のカフェテラス」、来年は「アルルの跳ね橋」と二度の『大ゴッホ展』に沸く福島。そこで、ファン・ゴッホの故郷オランダに縁のある銅像に目を向けたい。猪苗代湖の北西端、会津盆地へ流れる日橋川の十六橋水門沿岸に建つ、本山白雲（一八七一―一九五二）の手になる《ファン・ドールン像》である。

像主のコルネリス・ファン・ドールン（一八三七―一八八〇）は、明治政府に招聘され、一八七八（明治十一）年に猪苗代疎水（後の安積疎水）工事の実施設計に携わった土木技師である。彼の仕事は後年の猪苗代水力発電事業にも活用され、その功績を顕彰するため一九三〇（昭和五）年七月、事業関係者が銅像建設を提唱した。そして翌一九三一（昭和六）年十月に除幕されている。



本山白雲《ファン・ドールン像》
会津若松市湊町大字赤井（令和８年８月筆者撮影）

銅像制作者の本山白雲は高知県出身で、日本近代彫刻の巨星高村光雲に師事した後、東京美術学校を彫刻科第一期生として卒業した。多くの偉人顕彰像を手掛けており、中でも高知市桂浜で太平洋を臨む坂本龍馬の銅像（一九二八年）といえば、想起される方も多いだろう。そのような実績から、本作も「本邦鋳造界の巨匠」として白雲に委嘱された。

銅像は約二・四メートル（八尺）の高さがあり、直立して湖面を見据えている。左手に握るのは設計図面だろうか。台座に目を向けると、高さ約三・六メートル（十二尺）で石垣のように組まれている。銅像建設会発行の記念誌（一九三二年）によると、素材は近隣の小石ヶ浜から採集された自然石という。

他方、本作が大戦末期の一九四四（昭和十九）年、いわゆる金属類回収令によって供出されそうになった際の逸話もよく知られている。地域の人々はファン・ドールンへの恩義から、銅像が盗難に遭い供出できないと県当局に説明した。そして銅像を台座から降ろし、地中に埋めて隠してしまう。銅像はそのまま終戦を迎え、二年後に発掘・再建されている。その結果、本作は現存する貴重な戦前期の銅像のひとつとなった。

白雲は、自身が手掛けた銅像が次々と供出されていく中で、それらの石膏原型を叩き壊して埋めたという。怒りか悲しみ故か、その胸中を慮ることはできない。しかし、彼の銅像作品に対する姿勢や誇りが窺えよう。それほどの彫刻家が制作した作品が、地域の人々の力によって今日まで遺されている。猪苗代湖の水面を見守るその姿が、これからも変わらぬことを願いたい。